

大学において手話言語を体験学習する意義  
—「多言語コミュニケーション実践」の一環として—  
Experiential learning of sign language at university as part of  
multilingual communication practise

木村 護郎クリストフ KIMURA Goro Christoph<sup>1</sup>

**要旨**

本稿では、多言語コミュニケーション実践の一環として日本手話を学ぶ体験を組み込んだ大学の授業について報告する。授業全体における手話学習の位置づけ、担当者の意図や方針、進め方および履修者の気づきをとりあげる。履修者の学習報告からは、しばしば身振りと同化されたり、世界共通と思われたりする手話についての理解が深まるとともに、手話という個別言語をこえてコミュニケーションについての問題意識が触発されたことが示される。ろう者についても新しい見方がみられた。他方、学生の感想をとおしてうかびあがる理解の限界についても検討し、適切なフィードバックを行う必要性も述べる。最後に、このような、言語および言語使用者についての意識化をめざす体験学習を、多言語学習の1つのあり方として提起する。

**キーワード:**

日本手話、体験学習、言語意識

**Abstract**

This paper introduces a course offered at a university in Japan in which students have the opportunity to learn Japanese Sign Language from a Deaf teacher using the direct method. The comments of students indicate that such experiential learning can contribute not only to removing various prejudices about sign language, but can also provide new insights into communication in general. On the other hand, there remains the risk that limited exposure to the use of sign language can lead to doubts in learners' perceptions about the capability of complex expression in sign languages. It is concluded, therefore, that critical reflection after the learning experience is equally important in order to avoid possible misunderstanding.

**Keywords:**

Japanese Sign Language, experiential learning, language awareness

---

<sup>1</sup> 所属: 上智大学 Sophia University

## 1. はじめに

創設以来多言語主義を掲げてきた慶応義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)において、筆者は二つの授業「言語動態論」および「多言語コミュニケーション実践」を担当してきた。本誌前号で、「節英」を鍵語として、英語、他の異言語および日本語について検討していく「言語動態論」での実践を批判的言語意識醸成の試みとして紹介した(木村 2020)。それに引き続き、本稿では、「言語動態論」で学習推奨言語としてきた日本手話に実際に接する体験を組み込んだ「多言語コミュニケーション実践」に焦点をあてる。授業の趣旨および手話学習の位置づけを取りあげた後、手話についての履修者の理解がどのように深まるかをみていく<sup>2</sup>。そのうえで、手話学習が多言語への意識化のために持つ意義を検討する。なお、本稿の考察は、コロナ禍で対面授業が中断される前の 2019 年度までを対象としている。

## 2. 授業の概要と手話の位置づけ

### 2.1 授業の趣旨

授業「多言語コミュニケーション実践」は、知識を覚えることに重点を置く高校までの教育から、自ら問題を発見して探究していく大学での学びへの転換を行う科目の一つとして、2007 年に設置された。主な対象は一年次の学生であるが、実際には各学年の学生が履修してきた。受講者数は 30 人から 100 人ほどまで、年度や開講曜日によって幅があった。講義題名の「多言語」は、異言語、方言、敬語、俗語、文字などの言語・表現の多様性を広く指し、「コミュニケーション実践」は、他人がすでに整理・分析した資料(本やインターネット)に頼らない体験を念頭においた。この授業の主な目標は、次の二つであった。①社会における言語の機能や、(多)言語学習・使用に関わる諸問題への「気づき」を得ること。②言語を例として、一見とらえどころのない事象を分析する方法を身につけること。その際、文献や伝聞による事例ではなく、自分や他者が言語の学習や使用に接する過程を考察に取り入れることを重視した。

学期前半で、言語学習・使用を調査・記録するさまざまな方法論をとりあげるとともに、参加者全員で、新たな言語の学習・使用体験など、多言語コミュニケーションに関する実践を共有した。学期の後半では、それぞれの参加者が、授業時間外での自らの言語体験や多言語コミュニケーションの実例を記録・分析することをとおして、言

---

<sup>2</sup> 本稿は、NPO 法人手話教師研修センターで行った講演「聴者からみた手話の不思議」(2019 年 9 月 28 日)の内容をふまえている。

語の学習や使用に関する課題を発見し、それを掘り下げて最後に発表した。

## 2.1 手話講座の位置づけと内容

学期前半で履修者が共有する実践として行ってきた活動のうち、本稿では、ほとんどの開講年度で行ってきた手話学習をとりあげる<sup>3</sup>。手話をとりあげることの意義としてはシラバスで次のような諸点をあげた。①人間の言語は音声だけではなく、視覚言語もあることを知る。そのことをとおして、人間の言語の「本質」について考える。②聴者中心の社会におけるコミュニケーションの問題について考える。ふだんの生活がコミュニケーションに関していかなる暗黙の前提にもとづいているかを認識する。③身近な異言語・異文化としての手話・ろう文化について認識し、身の回りの「言語」「コミュニケーション」をふりかえるきっかけとする。

具体的には、ろうの講師による直説法での日本手話の実践的な入門講座を行った(基本的に90分を2コマ)。講座内容は、自分の名前、年齢や誕生日、家族、出身地や住んでいる場所の表現が中心であった。参加者には、手話を学びろう者と実際にコミュニケーションをとる体験を省察することをおして、手話の学習や使用に関するさまざまな課題を発見してもらうことをめざした。学期前半の進行は概ね次のとおりであった。

第1回 本講義の目的と方法 日本社会における言語をめぐるさまざまな課題について。

第2回 方法論① 社会のなかの言語に関する基本概念の検討、また方法論の概観。

第3回 方法論② 調査・記録法の種類と特徴を理解する。

第4回 方法論③ 基本概念および調査・記録法の種類と特徴のまとめ。

第5回 聴者とろう者とのコミュニケーションの可能性を考える。

第6回(土曜日の補講日に2時限連続) 手話の世界①、② 直接法による手話講習。

第7回 手話の世界③ 手話学習経験をふりかえって考察する。

## 3. 学生の気づき

以下では、過去の学生のコメントから、例年、類例が複数の学生からみられた特徴的な気づきのうち、とりわけ明確に表現された例を紹介する。本稿での主眼は、どの

---

<sup>3</sup> 海外からエスペラント教育専門家の訪問があった年に、エスペラント体験学習を実施したことや、ヒッポファミリークラブの協力を得て、多言語活動を行った年もある。

ような気づきが可能であったかという質的な側面にあり、数量的な分析は行っていない。年度によって授業内容に大きな違いはないため、年度記載は省略した。

### 3.1 手話講座全体に関する気づき

手話講座全体については、「音のない世界」への不安が、新しいコミュニケーション体験をとおして変容し、自分の「常識」の見直しにつながる気づきが繰り返しみられた。

- ・聾者の方が2コマも授業を行うというのが信じられませんでした。どんな授業になるのだろう、飽きてしまうのではないか、疲れるのではないか、などいろいろなことを考えてしまいました。しかし、実際授業をやってみるととても楽しく、普通の言語の授業よりも楽しいと感じました。
- ・何よりも、この授業は楽しかったのである。当初、授業を受ける前は言葉を話せない教師の授業は、とてもつまらなく、すぐ眠くなりそうだと感じていた。しかし、実際に授業を受けてみると私の考えていたものとぜんぜん違い、「動きのある授業」であった。彼の手の動き、体の動き、表情の動き。その全てが言葉となって、私たちに何かを伝えてくる。ただ口を動かして講義を行う教師の講義なんかより、ずっと面白いのである。
- ・今日の講義の第一印象は「非常に楽しい」でした。幼稚園に入園してから現在に至るまで、「音のない授業」というものは経験したことがなく、さらには“3時間、音のない世界”に自分の身を置いたというのも初めての経験で、とても新鮮で本当に楽しかったです。

とりわけ、音声や文字以外のコミュニケーションの可能性への気づきという点は多くの学生があげた。ある学生は、「声を使わなくても会話は出来る」ということを一番学ぶことができた。普段の会話の中で声を使うことは自分たちの世界では「普通」のことであり、それが一番使いやすいことなのだと思う。(…)それがなくても会話ができるなんて思いもしていない。それが偏見の元になることを、全く意識しないで生きている。そういった意識を一新させてくれたと思う。」と書いた。「手話に対する意識がガラッと変わった。気づいたことや感じたことが山ほどあり、感動して授業の途中で泣きそうになった。」という感想もあった。筆者はドイツ語も教えているが、泣くほど感動したという感想は残念ながら聞いたことがない。これは講師の力量の違いもあるだろうが、音声言語とは異なる手話が発見に満ちている面もあるだろう。この学生は次のように続ける。

具体的に気づいたことは、まず、人間は音声や文章[文字]を使わずに言いたいことが伝えられる

のだということ。講義の間先生が黒板に文章を書いて説明したのは、最後の「手話は視覚言語」ということだけだった。それにも関わらず、私たちは講義内容を全て理解し、最終的に簡単な自己紹介ができるまでになった。音声や文章なしでここまで相手の言いたいことが理解できたのは初めての経験だった。

### 3.2 視覚言語の特徴

もう一つ、例年一貫してみられたのは、「まだ手話になれていない私達は、手話でやりとりしている時に、目を見ず、手の動きだけを追っていた。O さん[講師]は、一人一人の目を見て、会話をしていた。」「コミュニケーションという点に注目しても「目」の役割は大きかった。ただ音や動作に情報を乗せるのではなく、目も使う。このことがこんなにも説得力や迫力を増幅させる効果があったのかと驚いた。」といった感想にみられるように、視覚言語としての手話のコミュニケーションにおける目の重要性である。この点は、ある意味では当然であるが、手話講座の最も基本的な気づきといえる。このことは、理解を確認しあうことが基本となっている手話のコミュニケーション文化への気づきにもつながっている。

- ・気付いたことは、「手話」という言語は「手」だけでなく「目」がかなり重要な役割を果たすことだった。音声言語は、音だけでも聞こえていれば情報の大部分は伝達できる。しかし視覚言語である手話では、手はもちろんだが目も使っていた。今自分が誰に情報を伝えたいのかという意味表示や、あるいは発信した情報が相手に理解されているかどうかの確認を目で行っていた。
- ・コミュニケーションが、目と目のアイコンタクトで取られている。音の世界では、見られにくい、素敵な文化だと思った。
- ・音声言語を用いる私たちの間では、よく「相手の目を見すぎでは失礼」とか「ときどき相手から目をそらしながらの方が相手も話やすい」などと言われるのを聞く。このマナーを手話文化にそのまま持ち込もうとするとどうなるか。良いマナーと言うよりもむしろ「人の話を聞いていない」失礼な行為となりかねない。手話を使う人と音声を使う人では、たとえ同じ日本人であっても、こうした表現のマナーやさらに大きく言えば文化が想像以上に異なるのだということを肌で学ぶことができた。

このような気づきはしばしば、これまでのコミュニケーションの取り方を問い直すことにつながっていた。SFC では、学生がノートパソコンなどを開いて授業に臨むことが多いため、筆者の授業でも学生が画面を見ていることが多く、コミュニケーションの不充

足を感じるがあったので、この気づきは筆者にとってもありがたいことであった。他方、このような気づきでは、視覚言語において目の活用はいわば前提であり、視線が狭義の「言語」とは別に意思疎通の役割の一部を担う音声言語コミュニケーションとは意味合いが違うということが理解されているかという疑問もある。この点は、ふりかえりのときに、視覚言語の特徴について議論する材料となる。履修者自身にも直接つながる気づきは、授業の趣旨から重要なので、少し長めに例をあげる。

- ・Oさんが生徒一人一人に改めて「ありがとう」と言っているところが印象的だった。普通はその場で「ありがとう」と声をかけるだけで済むが、ろう者の場合は手話なので、相手が見ていないと言いたいことが伝わらないのである。そのため、相手と目がしっかり合っているときに「ありがとう」と伝えていたのだ。これを見て、自分がいかに相手の目を見ずにコミュニケーションをとっていたのかということ省みた。今まで私はただ表面的な感謝の言葉を発するだけで、そんなに心のこもった返事や礼をしていなかったのではないだろうか。
- ・普段の声を用いての会話でも、相手の目を見たり、表情を読んだりという手話の会話の仕方を見習いたいと思います。相手の目を見るのはコミュニケーションの前提かもしれませんが、声の場合見なくても通じてしまうので、見ない場合が多い気がします。手話の会話の仕方は、そういう基本的だけど大切なことを教えてくれると思いました。
- ・手話は私が普段忘れかけていたことも教えてくれた。例えば、授業中に私たちは他のことをやりながらも音が入ってくるため、相手に目をむけなくてもその内容を理解することが出来てしまう。しかし、手話は心も目も相手にむけない限り相手の言いたいことが分からない。相手の言葉にいつも以上に集中し、ニュアンスを読み取ろうとした。これは、本来人間同士のコミュニケーションにとって一番大切なことであり、私たちが忘れてはいけないことを授業で教えてもらった気がする。
- ・[音声の]会話と違って「Yes/No/?」の意思表示をはっきりする必要があるのが新しかった。後半の手話を見るトレーニングの時、Oさんの問いかけに一つひとつにみんなそれぞれ「伝わっている」というサインを出していた。自分が教授者の立場に立つとき(もしくはプレゼンなどをする時)、聞いている人がちゃんと伝わっているという意思表示をしてくれることは相手が手話者でなくてもすごく大事だなと思った。今後自分も実践していきたい。
- ・普段授業を受けるときにしても、色々と調べたりメモをしたりするのに夢中になって、先生の話きちんと顔を見ながら聞いている時間はかなり少ないのではないかと。伝えようとしている人がいたらそちらを見るのがマナーだということに気がつき深く反省すると共に、普段からろう者の方の話を聞いた時のようにきちんと相手と向き合って話を聞くことで、関係性も変わって来るだろう。

### 3.3 手話に関する誤解について

次に、より具体的な気づきとして、手話についてよくみられる誤解に関する気づきをとりあげる。白井(2013:82)は、1. 手話は言語というよりはジェスチャーに近い、2. 手話は世界中で通じる、3. 日本の手話と日本語は文法がほぼ同じである、4. 手話は話しことばより習得が簡単である、5. 手話は複雑な議論をするには適さない、という典型的な誤解をあげている。授業を受けて、この誤解に気づくコメントも多かったが、一般的な固定観念を確認するようなコメントもみられた。それぞれの例を紹介する。

言語としての手話についての気づきとしては、たとえば次のような例があげられた。

- ・手話話者にとって手話は私たちの発する言葉と同様の働きをするもので、ジェスチャーのような感覚で捉えてはいけないと思った。
- ・修飾語と思われる語が決まった順番に登場しているところを見ると、手話は単語の羅列ではなく言語といえるのであろうと思った。
- ・音声ではなく視覚から情報が入っているということ。それは何かの不足ではない。ひとつの言語なのだということが今回の授業で感じられた。

「特に驚いたのは、全ての名字(漢字)が手話で表せること、一般的な、初対面で想定される会話に必要な表現が、全て揃っていること。」という感想からは、手話の表現可能性をきわめて限定的に、おそらくジェスチャー的にとらえていたことがうかがえる。一方、漢字のとり入れについては、「やはりわたしは、手話はジェスチャーに似ていると感じました。(…)漢字をそのまま思い浮かばせるようなものや、「田」のように、本当に漢字そのままのようなものもあったからです。」という感想もあった。手話にみられる写像性が、ジェスチャーに近いという受けとめ方をされる例である。

他方で、漢字についての気づきは、「日本的な特徴がよく表れていると思った。特に名前は基本的に漢字で表わされていた。同じ手話でも、外国の手話使用者とはうまくコミュニケーションできないだろう。」という感想のように、手話が世界共通ではないという気づきにもつながる。ここでは、「同じ手話」という表現から、手話は世界共通という前提がなおうかがえる。この前提は、「手話において黒色を表現する際に、自分の髪をなでるような動作をする(…)表現を知ったときに、わたしは「手話は世界共通ではなかったのか!」と思った。」という別の学生のコメントにみられるように、他の要素に気づくことによって、さらにゆらぐだろう。

漢字についての気づきは、「日本語の手話は日本語に依っていた。井戸の井、と

いう文字を表すのに作った形が井のような指先であるなど、日本語を基調とする体系がそこにあった」というコメントにみられるように、日本の手話が日本語に基づくという受けとめ方につながる場合もあった。このような感想は、語彙と文法体系を区別していないが、学生によっては、手話は音声言語を手で表したのではなく、視覚言語ならではの表現上・文法上の特徴があるという、より深い気づきもみられた。

- ・手話講習を受ける前、私は手話は日本語と同じ文法だと考えていたが、それが全く異なることを知った。たとえば、「私は 4 人家族です」という文章も手話では「私／家族／4／人」というように表していたし、「私は 18 歳です」も「私／歳／18」という語順だった。これは、英語とも異なっているし、手話独特の文法が確実に存在するということがわかった。
- ・口で話す時は、感情を声の大きさや高さや速さから読み取る事が出来るが、手話の場合は手の動きの大きさや速さ、顔の表情等から読み取り、手の表す位置関係が、会話の重要な部分になるのだと感じた。

視覚言語の学びやすさについても、次のように相反する見解がみられた。

- ・まず、手話での講義が始まってすぐに気付いたのは「手話は他の言語よりも覚えやすい」ということだった。私には手話の経験はなかったが、自己紹介の時点で先生が何をおっしゃっているのか徐々に理解できるようになっているのが自分でもよくわかった。これに対する私の見解は、「視覚は人間の情報収集の 8 割を司る」ということから、視覚からの言語の吸収は聴覚のものに比べると大幅に早いのではないか、ということだ。
- ・言葉にもよるが、手話の方が音声言語よりも正確に意味が通じる時があった。例)おじいちゃん、父、[夫、] (…)、息子、のように音声言語では繋がりのない語彙を増やさなければならないが、手話の場合、(…)男+親、男+子ども、のように表すので、(…)言葉同士を関連づけて、とても簡単に覚えることができる。
- ・説明を視覚で受けると、映像でその時の会話が頭に残っているため、印象に残りやすく、記憶に強く残った。
- ・学習に不利な点にも気付いた。手話は書き留めておけないので、記憶力と集中力が必要である。
- ・通常の言語と違い、手話を認識できる知覚器官は視覚しかない。普通より認識可能な方法を制限されたうえで、普通より高い集中力を要求されるこの言語を習得するのははるかに大変であると断言できるだろう。



同様に、手話の言語としての洗練度についても、下記のように異なる見解がみられた。手話の限界に関する疑問は、「今回の手話は日常会話が主だったのですが哲学とか数学とかの学術的な話は手話でできるのか疑問に思いました。」という感想にみられるように、本授業の手話講座が最初歩のみであったことの限界ともいえる。これらの点は、ふりかえりのときに、改めて手話言語学の書籍や動画紹介を含めて、補足説明を行った。

- ・手話というのはあくまで日本語という自然言語を前提とし、それに完全に準拠する成り立ちをした二次的な言語であり、日本語の体系をすでもつ者には習得が容易ですが、そのぶん意思伝達システムとしての性能は低く、表現できる内容の精度や、複雑さの程度には限界があると感じました。
- ・手話を学ぶ前まではすべての言葉を動作だけでは表現しきれないと思っていたが、複数の手話を連結させることによって多くのものを表現していることがわかった。(…)話し言葉と同じぐらい可能性があるように思えた。

### 3.4 ろう者についての気づき

言語以外の気づきとしては、ろう者についての気づきあげられる。この点については、社会生活におけるろう者の「障害」はあくまでも聴者主体の社会編成のあり方によって現れるということなどをふりかえりでもりあげた。

- ・先生はとても明るく、自分の家族が全員聾者であると言った時には、手で拍手をする素振りも見せていて、なんて前向きで明るいのだろう、と思いました。しかしこれはあくまでも私たち聴者の、「耳の聴こえない聾者が可愛そうである」という偏見の目線からであり、聾者だからといって明るくないというわけでは全くない、と改めて認識したとともに、自分の偏見的な目線を強く見直すことができました。
- ・最も印象に残ったのは、Oさんが自分の家族のことを紹介している姿だった。その直前に楽しい雰囲気の中で生徒の家族構成について話していたので、(…)Oさんが、娘がろう者かどうか尋ねたときに、わたしは動揺していることを隠せなかった。(…)明るい雰囲気の中に突然訪れた、暗い話題のようだった。しかし、家系図を追いながら、親族がろう者であることを話すOさんは、少しも暗くならず、それまでと同じようにユーモアたっぷりの表情で話していた。この事は、わたしにとって衝撃的だった。今までまったく意識してこなかったことだが、わたしは「身体障害を持つ

ていることは気の毒で、かわいそうな事である」という認識を持っていたのだ。そのことに気づくとともに、そんな認識をもっていた自分に対する恥ずかしさがこみ上げて来た。

- ・よく考えてみれば、O 先生はバイリンガルなわけで、(日本手話と日本語)どちらも似た言語のようで特性は異なっている。やはり手話は日本国内においては少数言語であるからどうしたって日本語無しには生活できないわけで、仮に O さんの子供が 2 人ともろう者であっても、日本語は生活をするレベルで身につくはずだ。このことを逆にとらえると、日本語しか使えないと、ろう者コミュニティに入っていくことができない、ということになる。(…)ろう者として生きる方が、ある意味世界を広げることになると言えるのかもしれない。

#### 4. まとめと考察

以上、履修者の報告からは、短時間の講習だけでも、手話やろう者について新しい見方を得るとともに、手話という個別言語をこえて、「コミュニケーション」や「障害」についての問題意識が触発される可能性が示されている。手話講座をとおして、ろう者のコミュニケーションについて、音声言語の自明視による「音がない世界」という理解から視覚言語による「目が活かされている世界」という見方への転換をはじめ、言語面、コミュニケーション面、社会面の気づきがみられ、自己のふりかえりにもつながりうることがうかがえる。このように、身近な異言語・異文化と向き合っ、自分の「常識」が理屈ではなく体験によって相対化される経験をすることは、その後、他の言語・文化と向き合うためにも有意義ではないだろうか。学生の言葉を借りれば「外国語のようで外国語ではなく、日本語のようで日本語ではない」手話は、気づきの余地が大きいだけに、多言語および多言語使用者についての意識化をめざす体験学習の言語として適していると考えられる<sup>4</sup>。

他方、以上みてきた限られた例から既に、人によって、観察の着眼点や気づきの深さに違いがあることが明確である。例えば、目の重要性についての指摘には、視覚言語における目の役割を、音声言語を含むコミュニケーションとそのまま比較するような単純化された理解や、漢字など日本語由来の要素にもとづく誤解や性急な結論づけもみられた。初歩の手話だけを見せると誤解が生じる可能性があることも明らかになった。学生のコメントをとおしてうかびあがる理解の相違や限界について検討し、適切なフィードバックを行う必要がある。履修者も、聴者である教員も、手話やろう者

---

<sup>4</sup> 前原(2020)は、本稿とは異なる観点から、異言語学習における視覚言語としての手話の特徴を提示している。

に関する気づきや発見といった学びの過程・途上にあることを自覚することが大切である。

#### 引用文献

木村護郎クリストフ(2020)「言語学習の基礎づけとしての言語意識の醸成—大学における授業の試みから—」『複言語・多言語教育研究』8号、129-139

白井恭弘(2013)『ことばの力学 応用言語学への招待』岩波新書.

前原真吾(2020)「手話言語の表現特性を外国語教育に応用する可能性について—教育的コミュニケーション行為の冗長性に関する試論—」『北海道大学ドイツ語学・文学研究会独語独文学研究年報』46号、1-34